

澁

谷

虎

雄

著

萬葉集評解

白楊社刊

凡 例

一、本書は古典評解叢書のうちの一冊として、萬葉集を選釋したものである。本文は寛永版本を底本とする新校萬葉集に従ひ、更に校本萬葉集・定本萬葉集その他を參酌して定めた。尙訓法について諸說のある所は、語解の條でその旨を記した。

二、語解は、要語につきなるべく詳しくこれを施し、特に文法的説明も怠らぬやうに心がけた。尙諸說の相異なる所は、その旨を記して、今後の研究に供するやうにした。

三、通解は、出来るだけ原歌の味に近く、いささかもその情趣を傷けまい、そしてしかも適確な口語釋となる様にと心がけた。

四、評は、從來の註釋書の無味無乾燥な弊を改めて、出来るだけ原歌の作歌事情又はその歌の情趣を布衍して、萬葉歌の本質に容易く味到出来るやうに努めた。

萬葉集評解目次

解説

一、萬葉集について

書名	一
編者	三
年代と歌數	四
歌の種類	五
用字	七
作者	一〇
歌材	一一
特質	一二
二、萬葉集の諸本	一四
古寫本	一四

刊本及び校本

註釋書

その他研究書

本文

一	こもよみこもち	三
二	大倭には群山あれど	三
四	たまはる宇智の大野に	四
六	山越しの風を時じみ	四
七	秋の野のみ草刈り葺き	四
八	にぎたづに船乗せむと	四
三	香具山は畝火ををしと	四
四	香具山と耳梨山と	三
五	わたつみの豊旗雲に	三
七	うまさけ三輪の山	三
八	三輪山をしかも隠すか	三
三	あかねさす紫野行き	三

二	紫草のにはへる妹を	三
三	河上のゆついはむらに	三
四	うつせみの命を惜み	三
五	淑き人のよしとよく見て	三
六	春過ぎて夏來るらし	三
元	玉禪畝火の山の	三
三	樂浪の志賀の辛崎	三
三	樂浪の志賀の大曲	三
四	白浪の濱松が枝の	三
四	鳴呼見の浦に船乗すらむ	三
四	吾が夫子は何處行くらむ	三
四	やすみしし吾が大君	三

一〇三	わが里に大雪降り………	一五
壺	吾はもや安見兒得たり………	二三
六	秋の田の穂の上に霧らふ………	二二
六	ありつつも君をばまたむ………	二〇
六	かくばかり戀ひつゝあらずは………	一七
六	君が行きけ長くなりぬ………	一七
六	うらさぶる情さまねし………	一三
六	丈夫の鞆の音すなり………	一〇
六	宇治間山朝風さむし………	一〇
六	葦邊ゆく鴨の羽がひに………	九
六	何處にか船泊すらむ………	七
六	引馬野ににほふ榛原………	四
六	巨勢山の列列椿………	九
六	采女の袖吹きかへす………	九
六	東の野にかぎろひの………	八
六	眞草灼る荒野にはあれど………	七
六	阿騎の野に宿る旅人………	六

一四	わが岡の體神に言ひて………	二六
一四	わが夫子を大倭へ遣ると………	二八
一四	二人行けど行き過ぎがたき………	二九
一四	あしひきの山の雪に………	三二
一四	秋の田の穂向の寄る………	二四
一四	人言をしけみ言痛み………	二五
一四	丈夫や片戀せむと………	二七
一四	たけばぬれたかねば長き………	二八
一四	人皆は今長しと………	二九
一四	石見の海角の浦回を………	三〇
一四	石見のや高角山の………	三一
一四	小竹の葉はみ山もさやに………	三七
一四	青駒の足搔を速み………	三八
一四	磐代の濱松が枝を………	四〇
一四	家にあれば筈に盛る飯を………	四三
一四	天の原ふりさけみれば………	四四

- 一四 青旗の木旗の上を……………一四
 一五 神風の伊勢の國にも……………一五
 一六 畚見まく欲りわがする君も……………一六
 一七 突磯の上に生ふる馬酔木を……………一七
 一八 高光る我が日のみこの……………一八
 一九 御立たしの島の荒磯を……………一九
 二〇 東のたぎの御門に……………二〇
 二一 朝日てる島の御門に……………二一
 二二 壺しきたへの袖交へし君……………二二
 二三 天飛ぶや輕の路は……………二三
 二四 秋山の黄葉を茂み……………二四
 二五 黄葉の散りぬるなべに……………二五
 二六 鴨山のいはねしまける……………二六
 二七 梓弓手にとりもちて……………二七
 二八 高圓の野邊の秋萩……………二八
 二九 御笠山野邊行く道は……………二九
 三〇 いなといへどしふるしひのが……………三〇

- 三一 いなといへど語れ語れと……………三一
 三二 大宮の内まで聞ゆ……………三二
 三三 たきの上の三船の山に……………三三
 三四 たまもかるみぬめをすぎて……………三四
 三五 淡路の野鳥が崎の……………三五
 三六 いなびぬも行き過ぎがてに……………三六
 三七 ともし火の明石大門に……………三七
 三八 天さかる夷の長道ゆ……………三八
 三九 けひの海にはよくあらし……………三九
 四〇 もののふの八十氏河の……………四〇
 四一 苦しくもふりくる雨か……………四一
 四二 淡海の海夕浪千鳥……………四二
 四三 旅にして物戀しきに……………四三
 四四 櫻田へ鶴なきわたる……………四四
 四五 吾が船は比良の湊に……………四五
 四六 天地の分れし時ゆ……………四六
 四七 田兒の浦ゆうち出てみれば……………四七

三八	あをによし寧樂の都は……………	二〇三
三二	吾が盛りまたをちめやも……………	二〇四
三五	しらぬひつくしの綿は……………	二〇五
三七	憶良らは今はまからむ……………	二〇七
三八	しるしなき物をもはずは……………	二〇九
三九	酒の名を聖と負せし……………	二一〇
四〇	あなみにくさかしらをすと……………	二一一
四一	この世にし楽しくあらば……………	二一二
四二	世の中を何に譬へむ……………	二一三
四三	武庫の浦を傍ぎ廻む小舟……………	二一七
四四	秋風の寒き朝明を……………	二一八
四五	丈夫の弓上振り起し……………	二一九
四六	鹽津山うち越え行けば……………	二二二
四七	吉野なる夏實の河の……………	二二三
四八	昔者の舊き堤は……………	二二四
四九	陸奥の眞野の草原……………	二二五
五〇	家ならば妹が手まかむ……………	二二七

四六	百傳ふいはれのいけに……………	二三八
四九	いはと破る手力もがも……………	二四〇
四二	草枕旅の宿りに……………	二四二
四三	吾もみつ人にもつけむ……………	二四三
四四	吾妹子が見し鞆の浦の……………	二四三
四五	人もなきむなしき家は……………	二四五
四六	妹として二人つくりし……………	二四五
四八	君待つと吾が戀ひをれば……………	二四七
四九	み熊野の浦の濱木綿……………	二四〇
五〇	神風の伊勢の濱荻……………	二四三
五一	をとめ等が袖振る山の……………	二四四
五二	夏野行く牡鹿の角の……………	二四四
五三	今更に何をか思はむ……………	二四七
五四	吾が背子は物な念ほし……………	二四八
五五	吾が背子が著せる衣の……………	二四九
五三	庭に立つ麻を刈り干し……………	二五〇
五六	千鳥鳴く佐保の河瀬の……………	二五三

五三 來むといふも來ぬ時あるを……………三三
 五四 君がためかみし待酒……………三三
 五五 此處にありて筑紫やいづく……………三五
 五六 君に戀ひいたもすべなみ……………三五
 五七 吾が宿の夕陰草の……………三七
 五八 夕されば物思ひまさる……………三八
 五九 相思はぬ人を思ふは……………三九
 六〇 戀ひ戀ひて逢へる時だに……………六一
 六一 月讀の光に來ませ……………六二
 六二 夕闇は路たづたづし……………六三
 六三 わが名はも千名の五百名に……………六三
 六四 一重山隔れるものを……………六六
 六五 ひさかたの雨の降る日を……………六七
 六六 情ぐくおもほゆるかも……………六八
 六七 世の中は空しきものと……………七一
 六八 大君の遠の朝廷と……………七三
 六九 家に行きて如何にか吾がせむ……………七五

七〇 悔しかも斯く知らませば……………七六
 七一 妹が見し棟の花は……………七七
 七二 大野山霧たちわたる……………七八
 七三 ひさかたの天道は遠し……………七九
 七四 瓜食めば子等思ほゆ……………八一
 七五 銀も金も玉も……………八三
 七六 正月立ち春の來らば……………八四
 七七 梅の花今盛なり……………八六
 七八 我が苑に梅の花散る……………八七
 七九 梅の花夢に語らく……………八八
 八〇 はろくに思はゆるかも……………九〇
 八一 君が行きけなぐなりぬ……………九〇
 八二 海原の沖行く船を……………九一
 八三 行く船を振り留みかね……………九三
 八四 天さかる鄙に五年……………九三
 八五 斯くのみや息衝き居らむ……………九四
 八六 吾が主のみたま賜ひて……………九五

八三 風雜り雨降る夜の…………… 二六

八五 世間を憂しと耻しと…………… 三二

九〇 稚ければ道ゆき知らじ…………… 三三

以上

萬葉集概説

一、萬葉集について

初めに萬葉集に就いて一わたり解説しておきたいと思ふ。まづこれを一言でいへば、萬葉集は凡そ持統天皇から淳仁天皇までの間に作られた歌、長短四千五百餘首を集録した一大歌集である。而して内容の豊富と歌調の特異と、思想上日本固有の精神の源泉をなす點で、和歌史に於ける独自の存在である。以下今少し詳しくこれを述べて見よう。

書名 此の本の書名をマニエフシフとよむか、マンネフシフとよむかといふ問題であるが、葉の字をネフとよむのは中世以降の読み癖で、萬の字の口音が、下の音に影響して、連聲れんじやうさんお(三位↓さんみの類)の關係からさうなるのである。さればといつてマニエフとよむのも、古くはこの様な撥音(飛びて↓飛んでの類)は無かつたのであるから、結局もとのまゝの読み方を求めるならば、マヌ

エフシフ又はマニエフシフとでも讀むのであらうが、こゝでは世間普通の讀み方に従つてマフエニシフと讀むことにする。

次に萬葉集といふ題號の意味についてであるが、これも古くから次の三通りの説がある。

(一) 萬の言の葉、即ち多くの歌を集めたものと解する説。(仙覺、眞淵)

(二) 萬世、即ち葉は世に通ずるので、萬世までも傳はるやうにといふ心持からつけたといふ説。(契沖、雅澄)

(三) 萬の葉、葉は木の葉で、多くの歌を集めたのを多くの木の葉に譬へたといふ説。(岡田正之)

さてこの三説の内で、成程(一)は常識的にはいかにも考へられ易いことではあるが、「葉をことの」の意味に用ひたのは平安朝中期以後のことと、萬葉時代にはまだ無かつたのであるし、又(三)は(一)の様に葉を言葉と考へないこと、又萬葉集は事實いくつもの歌集をあつめたまゝの集と考へられるから、その點から見ればこの説は捨て難いものではあるが、まだ當時の用例としての根據付けが薄弱の様に思はれるから、結局殘る(二)の萬世に傳はるべき集であると祝つて名づけたものと見るのが穩當と思はれる。もと／＼葉といふ字は世とか代とかいふ意味にも使はれる字で、その意味の「萬葉」といふ熟語は、唐以前の支那の文を始め、我が國でも、日本書紀、日本後紀、古

語拾遺等にその例が見出されるし、又萬世に傳へようといふ意味のことばは、勅撰集である千載集の序の中にも「過ぎにし方も年久しく今ゆくさきもはるかにとどまらむため」と、この様に見えるて、かたぐこの説に賛成して誤ないものゝ様に思はれる。先づ萬世不朽に傳はるべき歌集、これがその題號の意であらう。

編者　そこで萬葉集は何時誰が編纂したのであらうか。これも昔から随分研究されてゐて、古い説では勅撰集で橘諸兄が撰んだものといはれ、やがて大伴家持の撰といふ説が出、諸兄がまづ撰び家持が續いて撰んだといふ説もあつた。契沖は家持の私撰で草案のまゝ傳はつたものだと言つてゐる。又成立時代についても聖武天皇、平城天皇、孝謙天皇と、これまた色々の説があるが、然し古來の諸研究の結果から推察すると、これは、そんな一人の撰者で一度に出來たものとは考へられない。先づ卷一卷二は勅旨を奉じて撰び初め、それに色々の人の手になつた數箇の家集が參酌され、家持が補訂して、天平十六七年頃に一旦十六卷がまとめられた。それを更に四卷増補して（家持がやつたかと思へるが）、今日の二十卷が出來たのである。しかしその後時々手を加へられたが、今日見るやうな姿になつたのは大體、寶龜年間の頃であらうと思はれる。すると萬葉集はまだ不完全のまゝのやうに思へるが、事實この精撰を経ないで草稿に近いまゝに傳へられたといふ事は、却つ

て當時の色々な歌風や精神がそのまゝに窺はれて面白いのであつて、寧ろ吾々のためには幸であつたかもしれない。

年代と歌數 集中の歌は年代のはつきり判るものと判らないものとがほと半數づつであつて、その年代のやゝ明らかなものに就いて見ると、最も古いものは仁德天皇の皇后磐姫の御歌（紀元一〇〇七年以前）

君が行き日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ（卷二、八五）

をはじめ、木梨輕皇子の御歌（卷十三、三二六三）や、卷一卷頭の雄略天皇の御製等であり、その最も新しいのは、卷二十最終の歌の淳仁天皇天平寶字三年（紀元一四一九年）正月、大伴家持の作、

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事（卷二十、四五一六）

である。然し推古天皇以前の作は極めて少く、その殆どは持統天皇・文武天皇の藤原宮時代二十三年間と、元明天皇から淳仁天皇までの奈良朝五代四十八年間、即ち前後七十年間の作である。

次にこの歌の總數は、萬葉集目錄では四五六〇首、假名萬葉集では四五三三首、萬葉代匠記では四五一五首と、それ／＼集中の「一本云」「一云」「或本歌」などを計算に入れるか入れないかでその數が違つてゐるが、近來では諸家皆「國家大觀」の番號に従つて四五一六首と數へて居られる。

歌の種類 形式上から分けて見ると、(一)長歌、(二)短歌、(三)旋頭歌、(四)佛足石歌體歌の四種になる。勿論この内で短歌が一番多く四千首を越えてゐるが、長歌、旋頭歌が残り三百首を優に突破してゐるのは、後世にその比を見ない所で、この集の特色の一といはねばならない。

(一)長歌とは、五七・五七の繰返しの最後を五七七で結んだもので、その句數は色々あるが、集中最長は人麻呂の一四九句、最短は次の様に七句のものもある。

飯喫めど 甘くもあらず 行き往けど 安くもあらず 茜さす 君が情し忘れかねつも(卷十六、三八五七)

長歌は後世にもあるけれど、それらは皆この萬葉集の形式を模倣しただけの事で、本眞に内容のある長歌はこの集以外には先づ見られない。これもこの集の特色となつてゐる。

(二)短歌は現代のものと同じで、五七五七七の三十一文字の基本型のものであるが、たゞ現代のと違ふところは、「字餘り」「字足らず」がかなり多いことと、區切れが後世の様に五七五の上の句、七七の下の句といふ風に、「三句切れ」で上下分けて讀むやうなものが比較的少く、次の様に全く句切れの無いもの、

秋の野のみ草かりふき宿れりし兎道の都の假庵し思ほゆ(卷一、七)

或は四句切れ

六
茜さす紫野行き漂野行き野守は見ずや」君が袖振る（卷一、二〇）

又は二句切れ

吾はもや安見兒得たり」皆人の得がてにすとふ安見兒得たり（卷二、九五）

のやうなのが多いといふこと、この二つの點である。

（外に反歌といふものがあるが、これは長歌の後に添へられたもので、長歌に附屬し、その趣旨を簡約したり、補つたり、或は強調する爲に反復したりする役目をもつもので、その形は殆ど短歌のみである。尙一首の上句と下句とを二人で詠み合せた後世の連歌のやうなものが、卷八に一つ見えてゐるが特に言ふ程のこともない。）

（三）旋頭歌は次の歌のやうに五七七・五七七の形であつて

君がため手力疲れ織りたる衣きぬぞ」春さらばいかなる色に摺りてば好よけむ（卷七、一二八）

旋頭といふのは、頭の三句を後半の三句と前後置きかへても意味が變らないといふところからつけられたものである。集中六十餘首に過ぎないが、是亦眞に見るべきものは本集の中だけで、後世のものとは殆ど模倣に過ぎない。

（四）佛足石歌體歌といふのは五七七・七七の形で

伊夜彥神の麓に今日らもか鹿かの伏こすらむ皮服かはごろも着て」角つの附つきながら（卷十六、三八八四）

この様に短歌の終に更に七言一句をつけ加へたものである。

大和薬師寺にある佛足石を讃嘆した歌、例へば

人の身は得がたくあれば法の田のよすがとなれり勉めもろもろ、進めもろもろ

のやうな形と同じだといふ意味からこの名をつけたのであるが、この歌體の第六句は一首の大意にはさほど關係がなく、たゞこれを補足強調する意味で添へられてゐるのに過ぎない。

次に内容から見た分類は、凡そ左の三つに大別することが出来る。

(一) 相聞。さうもん 往復存問の意味で、勿論戀歌が多いのであるが、肉身間の贈答もある。

(二) 挽歌。はんか 柩を挽く時の歌の意で、病中又は臨終の作、後人の追憶の歌など、ひろく「死」に關係した歌を總稱してゐる。

(三) 雜歌。ざふか 右のどれにも屬さない色々の歌、例へば行幸、遊宴、驕旅などの歌を含む。

これらに加へて、他に譬喩、問答といふものもあるが、共に相聞の一種と見て差支へないからこゝには別に項目を立てない。又やゝ新しい時代になつては四季に分けることも行はれ出し、卷八卷十など、春相聞、春雜歌と順次に分けてあるが、別に區別して説く程のこともないと思ふ。

用字 萬葉集の撰ばれた時代は、まだ片假名・平假名どちらも出来てゐなかつたので、この頃の